

# 考えを深める子の育成 (3年計画の3年次)

校長 小林 淳

## 1 研究主題について

### (1) 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「進んで学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標は「みんなとなかよく進んで考えを深めていく子」と設定した。学習問題の設定の仕方を工夫し、話し合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

### (2) これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話し合いを通して思考力を高めるという課題をふまえ、令和2年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまづき、疑問などを取り上げて解決する必要感をもたせたり、考える内容を明確にして提示したりしたことで、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示したり、モジュールの時間に対話の仕方の指導に取り組んだりしたことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話し合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉を活用していても、十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、昨年度に引き続き、児童が主体的に学び思考力を高めることができるように、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。学習問題の設定では、児童の思考の「ズレ」を意識させて、解決しようとする意欲を高める工夫に取り組んでいく。また、話し合い活動では、教師のはたらきかけなどの指導を工夫し、児童同士が考えを積極的に交流し考えを深めていき、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

## 2 研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習課題を設定し、相手の意見を受けてつなぐ話し合いをさせることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

## 3 研究仮説

- (1) 「ズレ」を生じさせ、その「ズレ」から解決する必要感のある学習課題を設定することで、考えを深める意欲が高まるのではないかと。
- (2) つなげて話す場の工夫をすることで、考えを深めることができるのではないかと。

## 4 研究内容

### (1) 学習問題の設定の工夫

- ア 解決する必要感のある学習問題の工夫
- イ 学習問題の提示の工夫

### (2) 話し合いの指導や支援の工夫

- ア 根拠をはっきりさせて話し合いをさせる。
- イ 既習事項や経験を生かして話し合いをさせる。
- ウ 図や資料を用いて話し合いをさせる。
- エ 話をつなぐ言葉を用いて話し合いをさせる。
- オ 教師のはたらきかけを工夫する。(板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等)

### (3) 考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり

- ア 何でも話せる雰囲気を作る。(場の設定の工夫、話す聞くスキルの掲示)
- イ 学習の約束の定着を図る。(学習準備・ノートの書き方・振り返りの工夫)  
(学習の準備→八戸小「学習のやくそく」の活用・ノートの書き方)

### (4) 研究の検証

- ア 授業の中で児童が行う振り返りから、考えが深まったか変容を見取り、研究の日常化を図る。
- イ 児童に対して年2回のアンケートをとり、話し合いに対する意欲や実態を把握しながら研究を進める。

## 5 研究の経過

### (1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・助言者	授業の概要（校内研究との関わり）
9	14	第1回授業研究（6学年） 「円の面積」（算数） 授業者 教諭 高畑 和子	導入時に前時の図形との違い（ズレ）を意識させたり、ワークシートを活用して解き方を書かせたりしたことにより、自分の考えを説明したいという学習意欲が高まった。そのため、対話では多様な考えが出て、考えが深まった。
11	16	第2回授業研究（1学年） 「かたちづくり」（算数） 授業者 教諭 横内 佑依	導入時に前時との学習課題の違い（ズレ）を意識させたり、ワークシートを活用して考えの共有を行ったりしたことにより、友達の解き方を知りたいという意欲が高まり、対話が深まった。

### (2) 一般研修

月	日	内容・講師等
5	25	板書指導に関する研修
6	1	問題解決的な学習づくり (講師：八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事 福田 秀貴 先生)
8	22	1人1台端末の活用と遠隔操作について (講師：八戸市総合教育センター 主任指導主事 石井 一二三 先生)
9	28	1人1台端末の活用と遠隔操作について (講師：八戸市立旭ヶ丘小学校 教諭 佐々木 俊介 先生)
10	19	アセスの結果を活用した児童理解と活用方法 (講師：青森県総合学校教育センター 指導主事 工藤 直子 先生)

## 6 研究の成果

- (1) 児童の思考にズレが生まれるように意図的に学習問題を設定し、思考のズレを共有させることにより、問題を解きたいという学習意欲が高まった。
- (2) 「話す聞くスキル」を掲示し、授業の話合い活動を意識させてきた。また、考えを共有させる際に、教師が意図的にファシリテートを行い、考えを共有させることにより、対話による考えの深まりが見られた。
- (3) 昨年度より継続して授業の終末で書く振り返りに自分の考えの変容やその根拠を書かせてきた。そのことにより考えの変容やその根拠を意識して発言する児童が増えた。

## 7 研究の課題

- (1) 導入時に思考の「ズレ」をもたせること、また、その思考の「ズレ」を共有することにより、児童の対話への関心・意欲を高める研究を行ってきた。しかし、児童により関心・意欲に差があったり、関心・意欲の持続に差が見られたりした。
- (2) 対話の際、根拠をもとに話合い、自分の考えが深まったり、変容したりしたことを振り返ることができる児童が増えた。児童自身の対話について、児童・教師の共通する基準の必要性が出てきた。